

三宅義子さんの思い出

義子さん、暗闇のなかで輝いていた

ノーマ・フィールド

三宅義子さんに初めて会ったのはカリフォルニア州サンタクルーズ市で、学位論文を仕上げ、大学院生活に終止符を打つ頃だったので、1990年ではないかと思う。そして最後に会ったのは山口市で、2014年の2月下旬、つまり、亡くなるほぼ4か月まえのことだった。サンタクルーズでは間借りをしていたひろびろとした家のベランダで、北カリフォルニアの美しい日の光が降り注ぐなか、長時間お喋りに耽った。2014年の冬はとくにながかったのか、山口はもう3月に手が届くというのに在来線の車窓から見える梅は寒々としていたし、義子さんのひろびろとした家も暗くて肌寒かった。あまりにも図式的な対比に思えるだろうが、いま振り返ると、実際そうだったのだ。と同時に、あの暗闇が秘めていた力にも気付かされる。これについてはのちほど触れることにしよう。

義子さん—ミリアム・シルバーバーグに紹介されたこと、またアメリカで出会ったということもあって、当初から「義子さん」と呼んでいたのも、ここでもそう書くことにする。一著述で最初に読んだのは *Recreating Japanese Women, 1600-1945* (1991年) という英語圏では画期的な日本女性史のアンソロジーに寄せた “Doubling Expectations: Motherhood and Women’s Factory Work Under State Management in the 1930s and 1940s” という論文だった。母親として、労働者として、女性がいかに国家主義と戦争に動員されていったか。さらに、それが無理矢理にというのではむしろなく、積極的に、あるいは、主体的に騙されていったことがわかりやすく、具体的に伝えられている。安易に女性、とくに母親を戦争反対に結び付けることへの警戒心を植え付けてくれた大事な論考である。

もちろん、義子さんは平和運動においての女性の顕著な役割にも注目してきた。彼女の研究、とくに大著『女性学の再創造』では、動員であれ、抵抗であれ、こうした現象を考察することはいかなる歴史的、理論的検討を要するかを的確に示している。徹底したテキストの検証—自分で読んで考えること—を要求するのはあたりまえといえばあたりまえだが、実際は意外と軽視されがちだ。彼女の姿勢には厳しさも感じられる。ある種の理論偏重主義が旺盛な時代に大学人になった私は、義子さんの研究スタンスにはまれな理論と歴史考察の結合をみるのである。今後、再読を重ねて学び続けるつもりだが、ここでは「女性史からみた自衛官合祀訴訟—憲法20条と24条」(2013年)について一言しておきたい。山口という地で展開された中谷康子さんの夫の合祀反対運動は私の『天皇の逝く国で』の一章をなしているが、義子さんの考察を読むことは、私自身知らなかった、あるいは考え至らなかった側面に出会うというありがたい刺激となっている。中谷さんがたぐいまれな大小に及ぶ社会的抑圧探知機の持ち主であることは理解していたものの、彼女が粘り強く主張した信教の自由の本質はわかっていなかったのではないかとハッとさせられる。一審、二審の判決を覆した最高裁判決に関して、政教分離原則の違反から目を反らすため、

いかにも公平を装って他者の信仰に対して寛容であるべき、と唱えたことへの憤慨で終わってしまったのではないだろうか、と。義子さんの中谷訴訟の分析は憲法 20 条、24 条、そして 9 条のつながりを力強く示している。最高裁で唯一反対意見を出した伊藤正己裁判官が「憲法や裁判はいったい誰のためにあるのか」ということを問うている、と義子さんは書いているが、それはまさしく彼女の議論が私たちを導いてくれる地平線に他ならない。（『政治とジェンダーのあいだ』、224 頁）

中谷訴訟の位置づけに義子さんが取り組んだのは、山口に暮らすようになってからのことだ。当初、義子さんは県立大学に就職し、山口に居を移すことにやや否定的であった。そこにはよくある東京の生活以外想像しえない人の地方に対する意識も入り交じっていたと思うが、彼女はそれとは別次元のことも言っていた。尾道に育ったので、港町の明るさを知っている。それに比して、山口は山に囲まれていて暗い、と。たしかに山口は東京から遠い。それまで年に一度は会っていた私も、彼女が山口に移ってから再会したのは、片手の指で数えるほどにも至らないだろう。でも、訪れるのは楽しかった。彼女が生活を楽しんでいることが、地元で見つけた涼しげな麻ののれんを玄関にかけたり、免許をとって間もないのに萩まで連れて行ってくれたりしたときの様子から伝わってきた。そしてなによりも、地元の活動に生き生きと参加している姿がうれしかった。そこには義子さんの友人で運動家（「行動する女たちの会」）の弁護士、故・中島通子さんが提唱した「平場の論理」の雰囲気を感じていたように思う。中谷康子さんや中谷さんの裁判闘争を支えた故・浦部頼子さんとの交流が私たちの友情を深めたこともたしかだ。「平和憲法ネットワーク・やまぐち」や「憲法を活かす市民の会・やまぐち」の通信に寄せた義子さんの文章はとくに魅力的に思える。2011 年の秋、入院中の彼女をまだ元気だった浦部さんと泊まりがけで見舞ったとき、やっと自分が努力して求めてきた文章に到達した、という自己評価が印象的だ。

それは内容についてもいえるのではなからうか。例えば『平和市民』No. 8（平和憲法ネットワーク・やまぐち、2012 年 9 月 28 日）に掲載された「反原発運動 25 年—三浦翠さんに聞く」というインタビュー記事。三浦さんのながきにわたる活動経験に力づけられること多々あるが、男性と職場、経済優先など脱原発を阻むあつ壁が浮き彫りにされていることもありがたい。そして義子さん自身、脱原発運動のなかでの女性の際だった役割を強調している。この記事の感想を義子さんにメールで送ったところ、こういう返信があった。「この号を編集していてようやく私も山口の根本にある問題、それに取り組んでいる人たちにぶつかりつつあるという実感をもてました。」日付は 2012 年 10 月 19 日。余命わずか 1 年 8 か月と思うと、悔しくてならない。

さきほど義子さんの「厳しさ」にふれた。それはきっと彼女の誇りとも結び付いているのだろう。もちろん、自分自身に向けられた厳しさでもあるが、その厳しさと誇りがながい闘病生活をとおして彼女を気丈にしたにちがいない。それはどこからきたのだろう。2011 年 10 月に浦部さんと見舞ったとき、父が治安維持法で捕まったことにふれ、こどものころ、「アカ」と近所のこどもに指さされたことを話してくれた。そういう体験をもつ子は日本のみならず、世界各地にいるはずだ。親の左翼思想・活動とこどもの人格形成など比較研究の対象になっているのだろうか。もう少し時間が許されたなら、義子さんとういうことについてもあれこれ語り合えたように思える。メールを辿ってみると、新旧左翼

をいまどう評価するかなど、重要な、極めて興味深い話題に触れかかっていたことがわかる。

ひたすら楽しい話題もいくつもある。お互いお雛様好きとわかった後、娘に女兒が生まれると、義子さんはかわいらしいお雛様をわざわざシカゴまで送ってきた。たまたまこの原稿を書いているとき、その娘から義子さんの思い出話をいくつか聞くことができた。彼女が16才の夏休み、曾祖母の介護の手伝いのためひとりで東京に行ったが、こじれた親戚関係に悩んでいると、義子さんに自由が丘の喫茶店に連れて行ってもらって慰められたこと。義子さんの友人の同い年の娘さんを紹介してもらったうえ、義子さんが切符を手配してふたりで宝塚をみに行ったことなど、懐かしげに話してくれた。

そうなのだ。義子さんには長年にわたって、ずいぶんとお世話になったものだ。二年ぶりのお見舞いを思い切って提案してほんとうによかった。ちょうど入院の予定が入っていないので、うちに泊まって、といわれた。義子さんは車で山口駅まで迎えにきてくれた。家に着くと、まずまずの調子だったのだろう、あたりを少し案内してくれた。家の前の道路脇に恰好なベンチが置いてあって、ふたりで腰掛けた。ほそい道路を隔てた向かい側は幼稚園の園庭。ベンチからの景色は「借景」なのだ、と説明する。園児が通園がてら、ちょっと腰掛けることもある。その話し声を聞くのも楽しみなのだ、と。数年前からその幼稚園の理事も務めている、と聞いてびっくりした。

その晩は豪華な郷土料理をご馳走になった。義子さんは食欲もあって、明るいひとときに恵まれた。家に戻ったときはもう真っ暗だ。聴かせたい曲がある、といって、さっそくCDをかける。堀場清子さんの詩に宮本和侑氏が作曲した歌曲集だった。ひろい応接間は肌寒く、私はとうとうコートを手掛代わりにする始末だったが、義子さんは明かりもともさず、じっと聴き入っていた。

そのときは忘れていたが、半年前(2013年8月4日)送られてきたメールにこう書かれていた。「ポール・ロブソンのCDありがとうございます。Ballad for Americaを聞いていて、これは聞いたことがあると思い出しました。私はあまり音楽好きではなく、CDもあまりもっていないのですが、ロブソンは2枚もっています。Naming Namesを読んで興味をもち、あれを聞きながら翻訳をしました。力強く、正義への信頼をかきたてます。そんなわけでここ二三日はロブソンにはまっています。あともっているのは、ピリー・ホリデイ、ジェシー・ノーマン、エディット・ピアフ、みんな人物に興味があってそれからCDを買っています。それから沖縄歌謡、三線、繰り返し聞いています。」

その晩の私は、音楽を聴くというより、身動きもせず、全身で聴き入る義子さんから伝わる地場エネルギーの虜であった。

数か月後、堀場さんからこのCDが送られてきたが、まだ聴く勇氣は出ていない。

翌朝のテーブルには健康で食欲を誘う品々が賑やかに並んだ。暮れに甥御さんが泊まりにきたので、一生懸命お料理をしたのだ、と語る義子さんの声には弾みがあった。抗ガン剤治療でへとへとになっており、延命効果も疑問に感じていた彼女だが、栄養を取るために励んでいるか、よくわかった。それも強い意志の現れだ。こうも言っていた。「病気だからってものが書けないなんてウソよ。私なんか一行書いては横になっているもの。」そのころちょうど『政治とジェンダーのあいだ』の仕上げにかかっていたと思われる。

手元に『行動の人』浦部頼子さんの逝去を悼む(活憲にゆうすれたあ No. 189, 2013

年8月2日)というあたたかい客観性に満ちた追悼文がある。これも一行書いては横になってどうにか書き終えたものである。そしてその浦部さんへの約束を果たすため、「女性史からみた自衛官合祀拒否訴訟」を力を振り絞って書き上げたのだ。

「歴史家ミリアム・シルバーバーグー出会いと『再会』(2009年)の結びちかくに義子さんはこう書いている。「…それにしてもこの力作を送り出したミリアムさんに私は心から敬意を表したい。衰えてゆく健康と死の予感のなかでよくぞ執筆に集中し、完成にまでこぎつけたものだと感嘆する。」(『政治とジェンダーのあいだ』112頁)

いうまでもないが、これは義子さん自身にぴったり当てはまることばだ。義子さんも、死の予感はあったにちがいない。それでも命のしずくを一滴も無駄にしまい、という決意に導かれていたように思う。

朝食を終えて、彼女は言った。「来年も会えるような気がしてきたわ。また来てね」と。

義子さん、まだまだ、いや、ますます教えて欲しいことがいっぱいあったのに。ちょうど、これまでの人生を再評価するところに差し掛かっていたように思えます。そこからなにがうまれ得たのか。今日に至って想像しても、興奮を禁じ得ません。でも、あの夜、寒さもかまわず、暗闇のなかで音楽に集中する姿を思い浮かべると、あなたはみごとに人生を全うした、とふかく納得します。

